

5年間、ヤシの並木を通いづけて

松尾光雄

序

私は中学の時に、「民族とは」「人種とは」と大きな問題意識を持ち続け、時に教師を困らせたこともあったが謎は深まるばかりで、これらを大きく包括した「地理学」を専攻する意志を固めた。当時、関西では地理学科が置かれているのは本学を含めて関西大、京大、奈良大の4校しかなく、高校在学時の恩師の勧めもあり、市大を選んだ。学力が伸び悩み、2浪目に入った私は迷わず二部を受検して合格し、当面の所望をかなえた。しかし、本学のすばらしい環境に支えられ、地理学を十分に探求することなしには本分を果たせない。そこで、次のように仮説を立てる。



第1章

「*スタッフの充実している市大地理学教室で研究に勤めれば、地理学に関する探究心を満たしてくれる。」*スタッフ：とくに高潔な人格にして学才あふれる人物

第2章

この章では稚拙なエピソードを交え検証過程を踏む。まず二部へ来て感じたのは、サラリーマンの哀愁?のような、大阪湾に沈む夕日を背に、夕方から登校する寂しさだ。でも、心温まる学友と出会い、20人前後の小集団での講義の雰囲気ですっかり馴染んでいった。図書館の蔵書の多さ、多数の教官の多様さには驚かされた。学友とは体育の授業の後、よく市大の敷地北辺の焼き肉屋で親交を深め合ったのも、今ではいい思い出だ。

地理学専攻科へ進むと数人単位という授業になり、願ってもみなかった研究の環境が与えられた。時にはマンツーマンということもあった。もっとも、この場合は教官の提案で昼間の受講が変わったが。果たして、このような素晴らしい(教養、そして)地理学研究の環境下で、肝心の探究心は満たされたのであろうか。

当然、研究に勤しんだ(少し?)ので「満たされた」。すなわち、身をもって検証できた。しかし、欲をいえば、私の探究の核心である、民族学を専門にしておられる教官が既に他大学へ転任され、不在だったことが少々心残りだった。そのため、専門外の当時の教官や民族博物館を訊ねたり、院生や本学地理学教室出身の教授の助言を受けながら、研究領域を広げて卒論を完成させた。

終章

このように、私の地理学(文化地理学=民族学)に関する探究心はある程度は満たされたのだが、欲張りすぎたので卒論の内容を2本立てにしてしまった。その結果、中途半端な内容になり、達成し

たという気持ちになれなかった。そこで、本学卒業後しばらくして兵庫教育大学大学院で地理教育科を専攻し、卒論のテーマである空間認識の“認識”を、高校の地理教育に生かそうと修論に取り組んだ。＜詳しくは、兵教大図書館蔵の1993年度大学院修士論文を参照されたい。＞研究内容は“地理学”→“地理教育学”と異なっていたが、10年越しに達成感を味わえた。

“民族学”への探求は、人間の文化の多様性の探求につながる。人間の多様性の探求というのは決して尽きることはないので、正確な意味で“探求心”は「満たされる」はずはない。今後、私の現在の専門である地理“教育”、すなわち多様な子供に理解を支援することと相まって、終わりのない探求心は次の段階へと「発酵」（腐ってはいけけないのだが）していくのであろう。

しかし、研究成果は不幸にも私の現職場においては学校の性質上、一度も実践できず、研究意欲が日に日に減退している。（最近、腐りそうで危機感が増している…）

附記

最後に、学部在学中は卒業にいたるまで、常に温かいご指導と励ましをいただいた当時の、市大地理学教室の中村泰三先生、平野昌繁先生、小林博先生、山野正彦先生、春日茂男先生、今は亡き服部昌之先生、院生の上原秀明先生、大工大の高山龍三先生、そして学部生・院生の皆様、この場を借りまして心より感謝申し上げます。また、市大地理学教室50周年記念行事を企画された方々に、心の片隅に残っていたモヤモヤを文章にする機会を与えて下さったことを、感謝申し上げます。

（昭和58年卒業）